

遺伝子を調べて カンキツ種なし個体を幼苗期に判定

カンキツの優良品種にとって種なしは重要な条件です。そこで、種子をつくらない遺伝子を持つ品種を親に用いて交配し、その子どもたちの遺伝子を調べて、種なし個体を幼苗期に判定し、選抜します。

遺伝子診断を利用した選抜方法

1. 種子ができる品種を母親に、種子が出来ない品種を父親に交配を行います。

2. 出来た種子を播きます。子どもたちの半分は「種子が出来ない遺伝子」を父親から受け継いでいます。

3. 将来、果実をつけたときに種子ができるかどうかを、まだ子どもの時(種を蒔いて2年以内の幼苗期)に葉からDNAを抽出し、遺伝子診断を行います。

4. 「種子が出来ない遺伝子」をもった個体だけを畑に植えて実を成らせ、有望な個体を選抜します。



小さな苗の時に
判定できます

幼苗期に判定すれば種ありの不要な個体を5~8年間栽培せず済むので経費や圃場の有効利用に繋がります。

種なしの有望品種が誕生する確率が高まります。

